

■日 時：令和8年3月25日（水） 14:00～17:10

■場 所：慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科 @東京ポートシティ竹芝8F

■参加者：埼玉栄中学・高等学校 12名

■講演者：ムーンショット目標1 南澤孝太プロジェクトマネージャー(PM)

■応募の背景：

ひのもと

昨年、この交流会を通じて、目標5の日本PMの講演を聞き、生徒達は最先端の研究に刺激を受けた。この経験から、今回は、生徒達の関心が高い、目標1が目指す「サイバネティック・アバターによる生活の実現」について、身体の制約を超えて活動ができる技術が、私達の暮らしや価値観を大きく変える可能性があると考え、研究の現場を実際に見学することで、生徒達の探求心を高めるとともに研究開発への理解を深め、生徒達の今後の進路選択の一助としたい。

■概要：

<南澤PMによる研究紹介と体験デモ>

分身ロボットによる接客や体を自由に動かさない患者の脳波を使って動かすロボットアームなどの研究事例を交えながら、身体を媒介にした新しいコミュニケーション技術について分かりやすく紹介していただきました。テクタイルツールキットを用いた感覚を共有できる紙コップ実験では、リアルな触覚の共有に生徒達から驚きの声があがりました。

また、生徒達は、VR空間でのお絵描き、触覚の錯覚体験、伝統工芸職人の動作や感覚を再現したバーチャル陶芸、分身ロボット等の中から、自身が興味を持ったものを体験することで、触覚共有や身体拡張技術への感覚的理解を深めました。

<ワークショップ>

3班に分かれ「未来のコミュニケーション」をテーマにアイデア創出を行いました。各班からは、月面とのテレパシー通信、温もりを伝える抱き枕、ディスプレイメガネ+周回ドローンなど、短時間ながらも独創性の高いアイデアが提案され、試作品の発表では大いに盛り上がりました。今回の交流会では、講演・体験・議論という多角的なプログラムを通じて、生徒達が技術の可能性や社会実装に対する理解と関心を深める貴重な機会となりました。

■主な感想：

- ・自分が触っていないなくても他の人と感覚を共有できる機器に驚いた。
- ・開発した技術が、体の不自由な方々の社会参画のために活用されているなど、ムーンショット研究では様々な取り組みがあることを新たに知った。
- ・製作物をどのように社会に落とし込んでいくのかを考えるきっかけとなった。



南澤PMによる研究紹介



VR空間でのお絵描き



ワークショップ

